



青山学院大学舞蹈研究会

菊地 孝治

由利子

青学舞研30周年誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

資料を見ますと昭和46年（1971年）、青学舞研の指導を始めました。それからもう21年もたってしまいました。一口に21年と申しますが、現在の部員が赤ん坊か、うまれてない頃から舞研とかかわりがあったと思うと、自分達のダンス馬鹿にあきれており、何時迄も若いと自負していた自分にショックを感じました。仲人した部員同志のカップルの娘さんを教えている年令になりました。老いて益々円熟期に入った感じです。

最初は竹内君（青学舞研OBニューヨーク支部長）から『美女とイモの群れ』達を競技会での昼寝の時間を無くして欲しいと頼まれ、当時個性の強い有望なイモ達が沢山いたから自信を持って引き受け現在に至っております。

また分れていた部員を私の所に集めたのは根岸君の力量だったと思っております。

21年間の競技会や春夏の合宿のパンフを見るだけで、色々な顔が浮び上がってきます。振り返ると書ききれない程色々な思い出が頭の中を走馬灯の様によぎって参ります。

今日まで無事努められましたのも、現役部員各位の旺盛なる探究心と規則正しい練習会、上級生の統率力、OB各位の舞研への指導の賜物と深く感謝しております。

昔は、合宿に行くのに半日がかりでしたが、現在は高速道が出来て大巾に短縮され、非常に楽になりました。車で楽に行けますので、OB・OG各位には、もっと合宿に参加され、叱咤激励、立派な選手に成長する様、特に精神面でのご指導の程よろしくお願い致します。30年間には書き切れない程の名選手が続々と輩出して参りました。これは当人達の並々ならぬ努力の賜物で、決して私達コーチに依るものとは思って居りません。彼等のトロフィーや賞状には、マラソンランナーの様に、一つの事を何度も何度も、繰り返し繰り返し、何時間も何時間も続けた汗と涙の結晶です。また舞研を盛り立てた他のOBの方々も、クラブに入り、自分の体力や精神力に自信を持ち、また良き多くの友人を得られ、中には人生の最良のパートナーまで得られた方々も多数おられます。舞研に入部して非常に満足しておられる方々ばかりと拝察しております。

さて、本日は5年に一度の大きな会ですから、今日ご出席のOB・OGの方々には初対面の方々も多いと思います。30年と言う歳月は同じOBの方々でも親と子ほどの年齢の違いがでる一方、互いに名前も顔も知らない方がおられると思います。もう功成りて社会的地位を築き上げられた古き壮年OB、中年OB、新婚か独身の若きOB・OG、と名簿上の仲間なのです。思い考えて見ますと、この世の中お利口さんが多くて疲れますし、いつもこせこせ、日常の近所付き合いや、勤務先でも温かい人間関係など望めません。そんな時学生時代の仲間、同じ舞研のOBと言うだけで、利害損得を超えた、気のおけない仲間を思い出すと思います。OB会とは（ダンスそのものは無縁の方々が多いと思います）人間関係を同年代の枠を越えて、輪をどんどん広げて、皆さんで育て上げ、良い会にしていかなければなりません。その為にもOB会の会合に皆さん出来るだけ出席して親交を深めるようにして下さい。この30周年記念行事もできる限り多数のOBの参加を得て大盛会になる事を期待しております。

OB会の存在は精神的に現役を力づけております。

現役よ 逞しく 活気のある舞研をつくり、そのなかで精一杯に踊りまくれ。

以上

平成3年8月 甲子園野球を見ながら

錦見 隆雄

(S37年度卒)

1960年の安保闘争も終り、学院内には平和というか、しらけた空気の流れている1961年の初夏でした。小生は、大の親友である平沢徳久君の家へ泊まりがけで出かけ、話題が話題を呼び、夜を徹して語り合っていました。この中から、「何時でも気軽にダンスができるような場があるとたいへん素晴らしい」ということで、なんとなく2人の意見が一致しました。その後、学院内で「気軽にダンスができる場をつくろう」と、数人の有志に当たってみると、意外にも多くの反響が広がり、「同好会をつくろう」という空気が広がって行きました。こうなると面白いもので、「実は数年前にそういう同好会をつくろうと試みたのだ」という先輩が我々の前に現れました。その先輩は確か「藤井さん」といいまして、彼から青学の教授陣では英米文学部の島居教授（故人）がダンスには造詣が最も深いのだと聞き、早速島居先生の研究室を訪ねました。我々は、経済学部であったため、島居教授とはほとんど面識はありませんでした。しかし、ことの次第を説明しますと、教授は即座に気持ちよく「ダンス同好会」の顧問をお引き受け下さいました。ここで申し上げておきますが、当初の同好会の名称は「ダンス同好会」でした。従って、みんな「ダン研」「ダン研」と呼んでいました。現在の「舞踏研究会」の名称に何時変更されたかは、我々が大学を卒業した後のことですので、小生にはよくわかりません。

さて、同好会「ダンス同好会」は大学の教務部にも届け出され、正式な同好会として発足いたしました。1961年の秋だったと思います。発足したのはよいが、「お金はなし」「気軽にダンスする場所はない」「ダンスを教える先生はなし」で、ないないづくめで困りました。こんな時に、強力な助っ人・小川邦久君が入部してくれました。彼はその年の新人戦のタンゴ部門で、初出場で優勝してしまいました。

また、ダンスをする場所については、現在の青山学院記念会堂のところにあった木造の青学交友会館の地下ホールを借りることとして、練習兼ダンス講習会を始めました。ダンス講習会はもちろん有料で、確か1人1回50円で、これはお金を集めることが目的でした。ダンスに対する実力もないし、たいしたお金もなく、何ら研究会らしきことも出来ず、月日が過ぎてしまいました。1962年の夏であったと思いますが、平沢君と相談し、同好会の本来の目的である研究会らしい活動をしなればということになりました。そこで、いろいろと検討した結果、その年の秋に行われる青山祭の時のダンス・パーティで、デモ・ダンスを披露することになりました。

このデモのために、我々は初めて渋谷のダンス教室を訪れ、プロの教師からダンスを習うことを始めました。この結果、めでたく秋のダンス・パーティでは、デモンストレーション・ダンスを無事終了することができました。その時の腕の程は、皆様のご想像にお任せいたします。

1963年の春には、平沢君、小川君それに小生が大学を卒業し、それ以後の後輩諸氏に受け継がれ、今日の「舞踏研究会」が存続しているのです。

今後も益々「舞踏研究会」が発展することを、心よりお祈りします。

すてきな奥様・ダメオヤジ

松林 昌良

(S38年度卒)

舞研研究会が30周年にもなる。なんて素晴らしい!! ここまでくるのに、どんなにご苦労された方々にささえられたことか、まずは舞研30周年おめでとうございます。

30年も前に大学進学で挫折し、そうでない人達が楽しそうに伸び伸び生きているのを見て、ダンスでもと思い立ちました。

先輩に創設にご苦労された錦見・平沢・小川、後輩にがんばりやの本多・岩下各氏がおられました。夏には会津若松「泉郷閣」での合宿、クリスマスが近づくとパーティを企画し、講習会で券を売り、部費と部員集め。練習ではプロの磯見先生が時々ご主人(当時プロS A級)をつれてこられ指導に当たって下さり、学連に、練習に、思う通りに行かなかったけれども、今では楽しい部活ではなかったかと思っております。第8回全日本戦の時のパートナーが生涯の伴侶となるハプニングも含めて。阿部さん・横田さん・阿部ちゃん、こんな美女がいながら…。

やがて石川・加藤木両君へと苦労が続いていったのでしょうか。

「20何年ぶりにダンスをしませんか」近くの公民館でのダンス教室が見つかり、子育ても済み、フトメになりかけた家内からそういわれてからもう2年。昨年第1回市民スポーツダンス大会があり、会員の皆様と共にフォーメーションに参加し、夫婦では、下位ランク戦ながらラテンは準決勝まで、モダンの部ワルツでは3位になりました。

50才を越えるといろいろ考えることがあります。会社のこと、子供の将来、妻との老後等々。ふと若いあの頃を振り返ってみると、かつて本格的にやっていたことが、その頃はそんなに感じなかったけれど、今になってみると体と心の健康に役立っている上に、美女40数人を相手に友人を増やす機会にも恵まれるなんて!

こんな素晴らしい贈り物をしてくれた青学舞研に“カンパイ”

追伸

ダメオヤジが舞研にいたことは会社でも地元でも、ナイショ・ナイショ

運命の出会い

岩下 肇

(S40年度卒)

初めまして、昭和40年卒の岩下肇です。桑山さんですか。本当にOB会の会計幹事としてご苦労様です。おはがきをいただいてから、1ヵ月近くなるのですけれども、仕事のこととかその他のことで忙しくて、つい先日舞研の方からはがきが来ていたなあと、見ていたところ、いろいろな内容が書いてありましたので、これは1回本多君とか後輩の石川君、今はOB会の会長をやっておりますけれど、私もこの際罪滅ぼしといっっては何ですけど、何かやらねばと思い、思いつくままに思い出みたいなものをお話しさせていただきたいと思います。

私が舞研に入ったのは、ちょうど大学1年の夏過ぎでした。中学からずっと軟式テニスをしていましたが、大学に入りますと、それ専門にやっていたり、推薦や何かで入って来た人がいたりして、そういう連中のほうが巧いんですよ。夏休みは合宿なんかにも参加したんですが、なんとなく面白くない。何か他のクラブにでも入りろかと、友達と数人でそれじゃあ舞研に入ろうということになり

ました。最初は女性とダンスができるという、半分不純な動機で入りました。

その当時は、錦見さんという前OB会の会長さんが4年生の先輩として、いろいろ活躍されていました。練習は、大学の校友会館で週に1回か2回、ほとんど夜に2時間ぐらい基本ステップを習っていたような記憶があります。部室は高等部のあたりに鉄道研究会の連中と一緒に借りていて、我々舞研の溜り場になっていました。専属の練習場はありませんでしたから、森下仁丹のところにあったホールを借りたり、恵比寿駅前の公民館を借りて渋谷区役所に抽選を申しにいたり。あとは四ッ谷とか池袋とか、夜になるとクラブか何かになるところを昼間4・5時間借りまして、本当にいろいろなところを借り歩いて、まるでジブシー生活でしたね。

最初はクラスの連中なんかも一緒に入ったんですが、これも例年通り、今もそうでしょうけれども、何十人と入っても、2年・3年そして4年となると人数が少なくなって、本当にダンスを愛する人間だけしか残らない。私も1年の途中からですけども、曲がりなりにも4年卒業するまで舞研におりましたから、競技会も東都にも全日本にも出していただきました。振り返ってみると、いろいろ苦しいこともありましたけれども、今は楽しい思い出がいっぱいかなというのが現実です。

当時もやはり、同じ大学の部員とカップルを組むというのが、きまりというか暗黙のことでありました。私もその例にもれず、最初は1年先輩の湖上さんと組んで、新宿のホールで（何というかは忘れましたが）、新人戦に出ました。でもその後はいろいろと縁がありまして、当時としては画期的だったと思いますが、青学じゃない他の方とパートナーを組みました。教習所で偶然ダンスを習っていた人がいまして、運命的な出会いといったらおかしいかも知れませんが、その人と2年の終わり頃から組みまして、それから25年近く、現在も一緒におります。この時パートナーになってくれた女性が現在も一緒に住んでおります女房でして、そこいらへんのいきさつは同期の本多君がよく知っておりまして、いろいろ冷やかされたりしました。本多君には同期生といえども、いろいろな面で教えられるところが多くて、本当にいろいろなことでお世話になりました。今現在振り返ってみますといろいろな面で勉強になったなと思っております。

(録音テープより抄録)

創部30周年によせて

本多 豊司

(S40年度卒)

早いもので本年10月には、母校の舞研も創部30周年を迎える。

舞研第一期の新入部員として昭和37年4月に入部した私にとって感慨無量である。思えば、4年間の現役生活は短い期間であったが、その後の私の社会生活に大きな影響を与えてくれた。

マネージャー・主将・部長を努めた事は、企業の中で生活している現在の私と全く同様である。しかしながら現役時代は幾度も挫折感におそわれた。学生時代に他の活動もやりたいし、また、将来に対する不安も胸をよぎる。常に反省をしつつ、また次のコンペに向けて練習に励んだ。

結局卒部迄舞研生活を続けた事が現在の私に貴重な財産となっている。「続ける事」の難しさはこの社会でも共通である。高い目標と強い意志が人を育てる。またそれが自分に誇りと自信をもたらしてくれる。

創部30周年をOBとして迎える事が出来た私には、又一つの誇りと自信が加わった。

最後になるが、御指導を頂いた諸先輩や、舞研活動を継承してくれた後輩に心より感謝の念を捧げたい。

30周年をむかえて

O B会会長 石川 美雅

(S42年度卒)

私が入部してから28年もの年月が流れていきました。

先日家内と二人で4年ぶりに現役の夏合宿を訪問し、なつかしい思いを経験してきました。現役時代の様々な出来事が走馬燈のように目の前に浮んでは消えていきました。あいかわらずきついトレーニングに必死で耐えている1年生、どうしたらより多くの優秀な下級生を育てていけるのか悩みながら指導をしている3・4年生、そしてそのあいだで自分の置かれている立場を一生懸命まっとうしようとしている2年生、を見て25年以上もたった今でも舞研の本質は変わっていないなあと感じました。たった4年間のクラブ活動（現役時代はとても長く感じましたが）でしたが、そこから得たものは非常に大きかったように感じています。

その中でも「与えられたチャンスは、失敗を恐れずにチャレンジし、ベストを尽くしてみる」事の大切さを経験出来たことは、その後今日に致るまでの私の人生にとって大きな第一歩でした。

今年創立30周年を迎えられることになりましたのも、様々な先輩と後輩の方々の1年1年ごとの努力の積み重ね、そして菊池先生ご夫妻の厳しいけれど心暖まるご指導の賜物と心から感謝しています。現役の皆さん、何かの縁で入ってしまった舞研、たった4年間の学生生活、どうか自分のベストを尽くして見て下さい。そうすればきっと今年が40周年・50周年への第一歩になることと確信しています。

最後に私がO B会会長を努めてくれたのも、吉倉君・桑山君（ならびに奥様がた）をはじめとする幹事の皆様の協力があったなればこそ、と心から感謝しております。

喝 采

関山 由美子

(S47年度卒・旧姓中島)

【だれもない海 ふたりの愛を確かめたくって

あなたの胸に とびこんでみたの……】

1年生の夏の合宿、練習場へむかうマイクロバスの中で、私たちは修学旅行気分ではやりの歌を大合唱……。数日前から来ていた男子部員たちが、黙りこくって下を向いたままだった理由は、練習が始まってすぐに分かった。宿への帰りのバスの中ではベソをかきながら、という有様。

朝は5時に起きて、マラソン・柔軟体操・発声練習（応援のため）、朝食後9時から12時まで練習。午後は昼寝のあと2時から5時まで練習。夕食後もまた練習。

体育会系のノリで、といえば良いのだろうか。竹刀を持った上級生がバシバシ床などをたたく。最後の日にはハチマキまで締めさせられて……。

———いったい、これは何なんだろう。

足は腫れて、テーピングしなければハイヒールが履けない。身体中がいたい。

———悲しかった。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。

パーティダンスの講習会で「楽しそう！」って入部して、練習用のヒールを作ったり、色とりどりのパニエを作って、まるでお姫様気分させておいて……。

———くやしかった。

上級生のお味噌汁に、オモイッキリ塩を入れた子、荷物をまとめて「帰ります」って言い出す子。

——とにかくこんなはずじゃなかったのに！

夏休みが終わって、新入部員がずいぶん減った。当たり前だと思った。

でも、私はやめなかった。

——どうして？ 踊ることが好きだから……。

とはいえ、ハッキリ言って、チビでデブ。およそダンスには一番向かない体型の私。今考えれば、当然だと分かるんだけど、その頃は1年生でも、背の高くてスタイルのいい子が、上級生のパートナーとして試合に出られるのが羨ましかった。

いくら練習を休まずに出ていても、いっこうにチャンスは回って来ない。短大生だから、上級生になれば、っていう考えもなかった。

だから、2年生になって、フォーメーションのチームに入ることができた時はうれしかった。練習も楽しかった。いちよう並木や代々木公園でも人目を気にせず踊った。

その時の指導部長はアダ名は「クマ」。竹刀がよく似合う人だった。

お揃いの白いドレスとハイヒール。新人戦以外で踊れる日がやっと来た!!

——一生懸命踊った。

そしてあの日、日大両国講堂での全日本戦。フォーメーションの試合が終って、着替えている最中に放送が入って、

「優勝！ 青山学院大学 フォーメーションチーム」

その後が、どういう訳かしばし空白……、記憶がない。

ハッと気が付いた時は、デモンストレーションの最後のポーズで聞いた拍手の音。四方が客席で、谷底のようなところで踊っていたのだからそう聞こえたのか。わたしには「われんばかりの喝采」そのものだった。

拍手喝采。

あの音は今も忘れていない。

夢見る乙女の悪夢の合宿

鈴木 厚子

(S48年度卒・旧姓東原)

今は昔、昭和47年の春、うら若き夢見る乙女が、美しいドレスとロマンティックな音楽に憧れて、舞研に入部しました。部室では、フォークソングをみんなで歌ったり、先輩たちはやさしくて、おもしろい話を聞かせてもらったりで、乙女は楽しい部活生活をエンジョイしました。しかし、それはなんと夏の合宿に行くまでの、短い日々のことでした。

楽しみにしていた合宿に行ってみると、あのやさしいと思われていた先輩たちが、竹刀を振り回す鬼軍曹に変わってしまいました。美しいドレスどころか、練習着は汗だらけ、足はマメだらけ。朝から晩までの練習で、足がむくんでヒールが入らなくなる程でした。体育会の合宿と見間違える程のしごきのため、民宿のおじさんも真っ青でした。それでも乙女は必死にがんばりました。なぜなら合宿所が人里離れたところで、駅までは程遠く、夜逃げしようにも、車も通らなかったからです。

添付の写真は、そのつらい合宿の最終日のマラソン大会（女子は8km）で、乙女が残りの力をふりしぼって走った結果、3位の栄光に輝いた時のものです。向かって右の疲れ果てた可愛い顔が何をかくそう、その夢見る乙女です。

今は平成3年、あの辛かった合宿は、忘れることのできない、楽しい楽しい思い出となって、いつも乙女を励ましてくれています。

もと乙女 アッコ

一枚の写真、そして青春

尾崎 順一

(S49年度卒)

アルバムは久しく開いたことがない。見ようにも、どこにあるかわからない。かといって、探すにもどこにしまってあるか、聞くこともしない。ただこの写真は好きである。だからおぼえている。

最近も焼き直しして、記念にもらった。それもどこかに埋もれてしまっている。けれど情景を思い浮かべることが出来る。細かな部分はおぼろげであるが、「夏」「裸」「若さ」モノクロ写真がかもし出す白と黒のコントラストが、何とも言えぬ想いを、時間を超えて引き起こす。

私に限らず、この写真をアルバムにしたためている人は多いだろう。それぞれが様々な思い出と共に…。だからここで、私の思い出を書くことはしない。異なった思い出が、それぞれにあるだろうから。

仲間が集まり、酒を飲み、語り合う材料にとっておこう。

あ る い ち に ち

山口 憲雄

(S50年度卒)

「ラーメン、ギョウザ、それからピラフにスパゲッティに……」

電話の向こうの知らない声が、いきなり変な注文をしてきた。その数秒後、

「オレだ、オレだ、桑山です。」

今、30周年の記念日に向けて、会合をもったり、電話で打ち合わせをしたり、忙しい日々の中、少しづつ作業が進んでいます。今日は平成3年6月28日。猛暑が3日も続き、クーラーも効かない我が家で頭を悩ましております。このあと7時から、石川先輩のところへ、第2回目の会合があり、桑山先輩から原稿の締切りを宣告されているために、小学校以来の原稿用紙と戦っております。

7時からの会合には、私の入部以来の先輩から、苦楽を共にしてきた方々、またクラブを継続してくれた後輩が集まり、その日のために計画を練る予定です。

卒部後、16年の月日がたち、公用の時、私用の時、突然部卒の方々と出会ったりして、驚かされることが多くなり、また現役・OB会の会報が届くたびに、4年間の様々な思い出が甦ってきます。種々の出来事の中で出会った先輩・後輩が、気軽に声をかけてくれることを本当にうれしく感謝しております。式典の日には、お世話になった菊池先生ご夫妻他、先輩・後輩が100名以上集まることと思いますが、是非いろいろな方々とお会いして、今日までのご無沙汰を埋め合わせられればと、考えております。

迷惑をかけ続けていますが、この記念誌の発刊に向けて努力し、その後皆様方の舞研の輪が拡がり、続くことを祈ります。是非今後とも皆様方の努力で、現役生を励まし、OB・OG会を盛り立てていただきたいと思っております。

“フレー フレー 舞研！”

“フレー フレー オールドB&G”

追伸

お食事・ご宿泊、何かお役に立てることがございましたら、お気軽にご連絡下さい。多少のご優待はさせていただきます。(株)ホテルニューオータニ レストラン課に勤務しております。

今寺 真知子

(S50年度卒・旧姓滋田)

卒部してちょうど15年がたちました。運命の赤い糸のしわざか、それともダンスへの想いが絶ちがたかったせいか、お互いに定かではありませんが、四年生のとき1年間のリーダーのはずが、一生のリーダーになってしまいました。かつてはメイ・ファイナリストとして「フロアーの華」だった私たちも、歳月とは残酷なもの、お互いのお腹の出たのを罵り合い、ちらつき始めた白髪をなくさめ合う年齢になってしまいました。

卒部して半年ほど、アマチュアとして試合に出たりもしましたが、それぞれに新しい生活が忙しくなって断念。結婚後も2年ほど前に、3番目の子供がどうにか留守番できるようになったので、区のホールで行われている社交ダンスの練習会に2・3回行きましたが、これもそれっきり。今はもっはら世界選手権のテレビ評論家で、何とか再デビューをと夢見ているのですが…。

たった4年間の舞研生活が、15年たった今も、ただの思い出として懐かしむ以上に、私の中に根付いています。主人の出張などで「一番電車の時間に起きなくちゃ」なんてときも、「新人戦・八王子駅朝7時集合」（家から2時間以上かかります）に遅れないために、4時前に起きてお弁当作ってたことと思えば、ナンノナンノ…と感じられるのです。「ボクシング中継・後楽園ホールから」と聞くと、楽屋のサロメチールの臭い・先輩パートナーがつけマツゲをつけている時の横顔・落ちていたドレスのダイヤを踏んだときの感触までがよみがえります。北風がほほを刺す季節になると、「ああ12月なんだ、全日本の季節だもの寒いわけだな、田代の帰り道は寒かったな、両国講堂もドレスの背中が寒くて、喋ろうとしても口がこわばって動かなかったっけ……」ふだんの生活の様々な場面で、舞研時代の思い出が今でもちょくちょく顔を出します。

過日、家族旅行で信州方面に出かけたときも、地図で「富士見高原」の文字を見つけ、1年生の夏合宿「富士見観光ホテル（いったいどこがホテルだったの）」の話になりました。竹刀を手にした上級生が、私がそれまでに会った人の中で、最もオニに近い人だったこと（クマだったかな）、自分は上級生になっても、絶対ああはならないと心に誓ったこと（この誓いが実行されたかどうかは、下級生に聞いていただきたいと思います）、「そんなに怒鳴らなくて、やるわよ」と吐き捨てるように言った同級生の声、ヒールを履いたままの1時間の正座、フォックスのステップが覚えられずに怒られ、それを声をからして教えてくれた2年生…などなどなど。あれはそれまでの人生で体験した最悪の状態であり、そして最も貴重な青春の一コマだったのでしょ。

あの頃はまだ社交ダンスが今のように市民権を得ていませんでした。私の姉が友人との話の中で、たまたま私のことが話題になり、「妹はクラブでダンスやってるの」と言うと、友人はびっくりして「妹さん、大学生じゃなかったの…？」どうやらどこかのナイト・クラブのダンサーと勘違いしたようでした。二十オそこそこの女の子が、髪をアップにし、何やら大きな袋を下げた姿も、ご近所ではかなり奇異なものだったようです。

もし紙面が許すならば、あんな時こんな時の恨みつらみをもっともって言いたいのですが、ここはダンスの面白さ・難しさ・素晴らしさを教えてくれ、それにもまして、他ではけって味わえなかった貴重な体験をさせてくれた我が「舞踏研究会」とその仲間たちに、改めて感謝したいと思います。

また最後に、今回の三十周年記念行事に向けてご尽力されました、石川会長始め代表幹事の方々、ご苦労さまでございました。そして、毎年OB会費徴収という一番の嫌われ役をお引き受けくださり、お忙しい中私たちにOB名簿を毎年お送りくださっている桑山先輩に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

高橋 秦平

(S53年度卒)

私が在籍したのは、昭和50年からの4年間である。

第一次石油ショック後、急激なる円高ドル安を背景に、輸出依存型の日本経済も、その体質変換に苦しみ、景気も暗雲立ち込めていた頃である。したがって、我々学生達も、就職戦線に関しては、実に厳しい状況におかれた頃で、現在の学生のような、いわゆる売り手市場には程遠く、考えても及ばない時代であった。

その様な時代背景ではあったが、私の舞研生活は、実に奔放で、そして実に充実したものであった。青学舞研も創部30周年を迎えた。これは、実に喜ばしい事であり、そして、少なくとも競技ダンスというものが、一過的なものではなく、スポーツとして、その地位を確立したという事実が、創部30周年を導いたのだと思ってる。

私も、数多くの試合に出場したが、その中でも、特に印象深く、忘れる事の出来ない試合があった。それは、2年生の秋に行われた桜門戦と、言うまでもなく、4年生秋の東部I部戦である。

前者においては、2年生ながらの優勝もさることながら、両国にあった日大講堂での、最後の開催になっていたからである。壮麗な会場は、学生競技ダンスの頂点であり、我々の目指すところではあったが、残念ながら、消防法の改正に伴い、この試合を最後に、長い歴史に幕を閉じたのであった。

少し気障にはなるが、日大講堂の最後のデモンストレーターは私である、という視点からも、この試合は思い出深いものである。

最上級生となった1978年は、米映画「サタデーナイトフィーバー」の大ヒットもあって、ダンス界においては、何かと話題性の多い年であった。映画の中で出てくる、斬新なステップは、直ぐにラテン部門に応用されたのを記憶している。

シーズンを通じて、様々な競技会が催されるが、最上級生として、私は、東部I部戦にそのターゲットを絞っていた。

試合が近づいた頃、田代ダンス教室でのレッスンは、それはもう殺気立ったものになっていた。私はパートナーの石井さんとは、練習中、一言も喋らなかつたし、曲が始ればただ「あ・うん」の呼吸で踊っていたのである。

また、菊地先生も、あまりアドバイスはされず、ただ一言「ゴーイングマイウェイだぞ」と、言われた事を覚えている。

変なもので、かなり意識したこの試合も、なぜか妙に落ち着いて臨むことが出来、自分でも、パーフェクトな踊りをする事が出来たのである。

私は、このパーフェクトな踊りをした、という観点から、この試合を思い出深く、そして、忘れられない試合というものに、位置づけてしまったのである。

プロセスの大切さは、改めて言うまでもないが、王道に近道は無く、あの当時、時間の許す限りレッスンをした、あの情熱が、パーフェクトな結果を生んでくれたのだと、今でも心の中に思いこんでいるのである。

取り留めもなく、ペンをとってしまったが、1978年の私の思い出は、決してセピア色ではなく、いまだに天然色である。

天然色である限り、私は、舞研に対して、何か恩返しをしなければならないのだ、という気持ちでいっぱいである。

最後に、当時パートナーとして頑張ってくれた石井さん、そして、常に親身になってレッスンして下さいました菊地先生御夫妻、並びに御指導いただいた諸先輩方に、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

主将 本田 守

(4年)

クラブ創立30周年の記念誌に私の言葉が載るといのは大変光栄な事なのですが、何を書いてよいか、思い出も数えきれないので、長くならないよう三つに絞ってお話したいと思います。

まず私が感じるダンスにおける魅力ですが、やはり別々の動きをする男女が一つのもののようにかみあって動く、というところです。足がからんで倒れそうで、実際からまない。何か動きそうもないものを押したら案外動ける。リーダーという名目で女の子をふりまわせる。こんなところが他のスポーツにはない面白さですね。

次にクラブに関する魅力が、上手く言えませんが、個々にやっている時に感じられないパワーを感じた時、クラブはやはりいいものだな、と思います。練習会、合宿、青祭、コンパ、そして当然ながら競技会で味わった思い出は、どれも私にとって大学生活の宝物です。私はダンスがとても気に入っていますが、一度もクラブを辞めてアマチュアでダンスを楽しみたいとは思いませんでした。先輩、同輩から学んだこと、また後輩から学んでいることもたくさんあります。私にとって競技会での印象的だった思い出は、先輩、後輩がもうちょっとのところで負けた悔しさや、応援していた先輩が初めてレギュラー戦で入賞した時の嬉しかった体験です。今は自分の後輩が試合でがんばっているのを見るのが、たのもしくもあり、喜びであります。

最後に主将である私のクラブに対する想いですが、これからよい縦のつながりを大事にしたいということです。それぞれに感じるダンスの魅力を後輩に伝え、伝い合える様なクラブにしたい、そしてこれからもそうやっていてもらいたいと思います。折角の大学生活、1・2年生のうちにはダンスに生活を縛られるより、上手にのびのびとエンジョイしてもらいたい。そして気合いを入れようと腹を決めた時、または上級生になった時、改めてクラブ、そしてダンスに打ち込んでほしいと思います。クラブにはいろんな人がいてほしい。個々のカップル、または個人個人の活動、成績にこだわり過ぎず、クラブ全体の中で自分はどんなことをすべきなのか、そんな自覚を持つことを2年生以上には期待します。また私の舞研生活の中では他大学の仲間との楽しかった思い出がかかせないので、広く積極的に他大学の人たちと交流をもっていてもらいたいと思います。青山学院大学舞踏研究会に在籍していることが誇りに思えるようなクラブにしていきたいと思います。

私の舞踏研究会…現在燃焼中

マネージャー 伊藤 正浩

(3年)

あの日は4月10日、健康診断の日だった。私はいろいろなクラブやサークルに勧誘されたが、どのクラブもあまり決め手がなく、また別の日にさがそうと厚木キャンパスのメインストリートをバスターミナルに向って歩いていた。すると、I館の前あたりで当時4年生だった内田、石田両先輩が近づいてきて、「君、どこのクラブに入るか決めたかなあ」と声をかけてきた。私は「またか」と思い、適当に断って帰ろうとすると、腕を引っ張られ、強引に？教室に連れて行かれた。教室に入ると、そこでは、パーティステップ講習会という異様な世界(当時は本当にそう思った)が広がっていた。私はその世界に圧倒されていたが、男子校出身だったということも手伝ってか、1つ上の大谷先輩に誘われるままに、私もいつの間にか異様な世界に入り込んでいた。しばらくすると、「これからデモンストレーションをおこないます」といわれ、何が始まるのかと見守っていると、当時4年生だった高田、

峰岸先輩による、クイックステップのデモンストレーションだった。それを見て、本当にかっこいいとは思ったが、まだまだ自分がこのクラブに入るとは思ってもみなかった。

しかしその後、コンパにいて、お酒をタダで飲ませてもらい、先輩たちと楽しく過ごすうちにこのクラブに入部することに決め、次の日には、同じ1年生だった鈴木たちといっしょに上級生のスタジャンを借りて、部員になりきって（先輩達の思うまま）新入部員を勧誘していた。このようにして部員になったのだが、ダンスのことなどまったく考えず、新しい仲間達と楽しく過ごしているだけだった。しかし、夏季休暇に入り、夏合宿になると、いままでとても優しく楽しかった先輩達の態度が一変（特にトレ部）、一日中、山道を走らされ、フロアーでも思いきり絞られた。その7日間を終え、競技会のシーズンに入って、ようやく自分が舞研に入ったことを実感するようになっていった。そんな私がもう3年生になって、新勤では新入生を引っ張り込んでパーティステップを教え、コンパではタダ酒を飲ませて恩を売り、合宿では下級生をしぼり、競技会では下級生たちの見る前でレギュラー選手として、フロアーに立ち、もうすっかり、舞研人になりきっている。

私には、あと一年半舞研生活が残されている。この一年半を舞研人として、悔いなく完全燃焼しようと思う。



昭和38年10月 青学キャンパスにて
左より本多、阿部、岩下、松林、湖上



東都戦 ワルツ リーダー 岩下



昭和40年 夏合宿



昭和40年 全日本戦
フォーメーション クイックステップ
右よりリーダー 加藤木、石川、岩下
パートナー 石川、北井



昭和40年 卒業記念
青山キャンパスにて
舞研部員一同



昭和40年 卒業記念
青山キャンパスにて
右より 岩下、本多、阿部、北井、飯田



〈青山祭〉 わんこそば風景

当時のマネージャー(越村さん)の発案により始められた。わんこそばは今では舞研名物となっている。

左より 野本(旧姓)、2人おいて松崎、桑山1人おいて中島 昭和46年秋



〈天野杯争奪戦〉：独協大学にて

この試合では尾崎-富田組(右から2カップル目)が華々しくファイナルに勝ち進んでいる。昭和46年



〈10周年記念パーティー〉：東郷記念館にて
私1人スリーピースでビシッと決め、
あるOBからはてっきり卒業生と勘
違いされていたそうです。〈桑山〉
昭和46年



〈夏期前期合宿〉：山中湖にて
朝もやの立ちこめる午前6時から朝のトレーニングが始まる。
1年生なのにまん中でキャプテンの根岸さんより偉そうに
しているのが私です。〈桑山〉
(当時の舞研のキャッチフレーズは『美女とイモの群れ』)
昭和46年 夏



〈旧部室前〉にて
 鉄道研究会と同居していた旧部室前にて
 前列竹内、中列左から鈴木、尾崎、桑山、加藤、後列越村さん
 尾崎のなんと若々しい顔よ、今からはとても想像出来ません。
 昭和47年 初夏



〈秋の全日本戦〉フォーメーション優勝
 「哀愁のアダージョ」に乗せて、3年生の松崎正昭を
 筆頭に2年生全員が一丸となり踊りました。
 「わんこそば」で得た収入で女子のドレスをもとめ
 根岸、箕浦両氏の厳しい指導により優勝出来ました。
 これこそ学生競技ダンスの真髄だ。
 昭和47年

昭和47年 春 東部戦にて



昭和47年 春 東部戦にて



昭和47年 夏合宿 マラソン大会入賞者
上左より野本、遠藤、東原
下左より藤田、松崎、加藤



昭和48年 全日本戦
フォークストロット 優勝





昭和50年〈全日本戦〉ワルツ 5位：両国講堂にて最後の試合で自己の能力を十二分に出せ、4年間の競技生活の中でももっとも思い出に残っております。

1年生の初めての試合(新人戦)で、ノーチェックで1次予選も通過出来なかった私が、全日本戦をファイナルで飾れたのも、ひとえに菊池先生御夫妻とパートナー滋田(旧姓)さんの献身的協力の賜物であり、感謝しております。



全日本戦Wのデモンストレーション
昭和53年12月 高橋、石井組

昭和61年 夏合宿



昭和61年 夏合宿



昭和62年 新歓旅行

昭和62年 春合宿



昭和62年 青山祭



平成1年 東都戦 フィナーレ



青山学院大学 舞踏研究会
創立30周年記念行事 実行委員会

| | | | |
|------|-------|-------|--|
| 委員長 | 石川 美雅 | | |
| 副委員長 | 吉倉 康夫 | 桑山 光行 | |
| 委員 | 尾崎 順一 | 今寺 隆政 | |
| | 山口 憲男 | 塩沢 一郎 | |
| | 中村 彰宏 | 須藤 洋平 | |

Printed by **Istem Japan co.,ltd.**

拝啓 秋冷の候 OB各位には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。さて9月28日に開催されました創立30周年記念パーティーには、顧問の相馬先生、コーチの菊地先生ご夫妻をお迎えし、多数のOB会員と現役との楽しく有意義な一時を過ごすことができましたことをご報告申し上げます。

青山学院大学舞踏研究会創立30周年記念パーティー会計報告書

| | (収 入) | | (支 出) |
|----------|---------|------------------------------|--------------------|
| パーティー会場費 | 730,000 | OB: 59,000 現役: 14,000 | パーティー会場費 824,969 |
| ギンゴ代金 | 87,000 | | 記念誌代 300,000 |
| 祝儀 | 40,000 | (臣代: 10,000) (菊地: 30,000) | 菊地先生へプレゼント 100,000 |
| | | | 軍代 (菊地先生) 10,000 |
| | | | (相馬先生) 5,000 |
| | | | 会場責任者チップ 10,000 |
| | | | 二次会援助 39,600 |
| | | | 通信費 5,000 |
| | | | 雑費 (リボン) |
| | | | (ギンゴカード) 6,521 |
| | | | 写真代 78,275 |
| | | | 三代先生お返し 4,635 |
| 合計 | 857,000 | | |
| | | ▲ 527,000 (OB会場より支出) | |

上記ご報告致します。

' 91. 10. 31.

代表幹事 桑山 光行

以上